

Asia Indicators

発表日: 2020年7月31日(金)

豪州のインフレ率は 22 年超ぶりのマイナスに (Asia Weekly(7/27~7/31))

～エネルギー価格の低下に加え、新型肺炎感染拡大の影響も重なり物価に大きく下押し圧力～

第一生命経済研究所 調査研究本部 経済調査部
 主席エコノミスト 西濱 徹 (TEL: 03-5221-4522)

○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
7/27(月)	(香港)6月輸出(前年比)	▲1.3%	--	▲7.4%
	6月輸入(前年比)	▲7.1%	--	▲12.3%
7/28(火)	(マレーシア)6月輸出(前年比)	+8.8%	--	▲25.5%
	6月輸入(前年比)	▲5.6%	--	▲30.4%
7/29(水)	(豪州)4-6月消費者物価(前年比)	▲0.3%	▲0.4%	+2.2%
	(香港)4-6月実質GDP(前年比・速報値)	▲9.0%	▲8.3%	▲9.1%
7/30(木)	(香港)6月小売売上高(前年比・数量ベース)	▲25.4%	--	▲34.0%
7/31(金)	(韓国)6月鉱工業生産(前年比)	▲0.50%	▲5.00%	▲9.80%
	(中国)7月製造業PMI	51.1	50.8	50.9

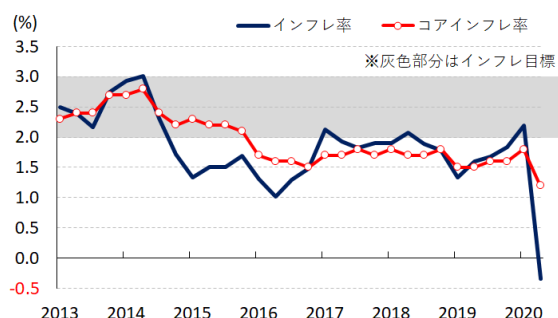
(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

[豪州]～エネルギー価格の下落や新型肺炎による影響もあり、インフレ率は 22 年強ぶりのマイナスに転じる～

29日に発表された4-6月の消費者物価は前年同期比▲0.3%となり、前期(同+2.2%)から大幅に伸びが鈍化して1998年1-3月以来となるマイナスとなった。前期比も▲1.9%と前期(同+0.3%)から下落に転じており、前期比ベースで下落となるのは2016年1-3月以来4年以上ぶりのこととなるほか、マイナス幅は過去最大となるなど急速に下押し圧力が掛かっている。前期については7四半期ぶりに中銀(豪州準備銀行)が定めるインフレ目標(2~3%)の範囲内に収まったものの、再びこれを下回るのみならずマイナスとなるなど大きく下振れしている。生鮮品を中心に食料品価格の上昇ペースが鈍化していることに加え、国際原油市況の低迷長期化を反映してエネルギー価格は軒並み下落するなど、生活必需品での物価上昇圧力の後退が物価の予想以上の下振れに繋がった。なお、豪州ではトリム平均値(刈り込み平均値)ベースのインフレ率をコアインフレ率としているが、当期は前年同期比+1.2%と前期(同+1.8%)から鈍化して過去最低の伸びに留まるとともに、前期比も+0.07%と前期(同+0.52%)から上昇ペースが鈍化するなどインフレ圧力が後退している。エネルギー価格の下落を受けた輸送コストの低下を反映して幅広い財価格に下押し圧力が掛かりやすくなっているほか、新型コロナウイルス(SARS-CoV-19)の感染拡大に伴う外出規制措置を受けた需要鈍化も物価の下押し要因になっている上、雇用・所得環境の急激な悪化も影響している。さらに、政府が新型肺炎対策として保育所の利用料を無料にする措置を実施したほか、教育関連を中心に無償化の動きが広がっていることも一時的な物価の下振れを招いている。なお、ガソリン価格の下落、保育料の無償化及び教育無償化などの影響を除けばイ

ンフレ率はわずかに上昇しており、通貨豪ドル相場の下落に伴う輸入物価の上振れがインフレ圧力に繋がっている可能性はあるものの、景気減速の影響で物価は落ち着いた推移が続いていると言える。

図1 AU インフレ率の推移

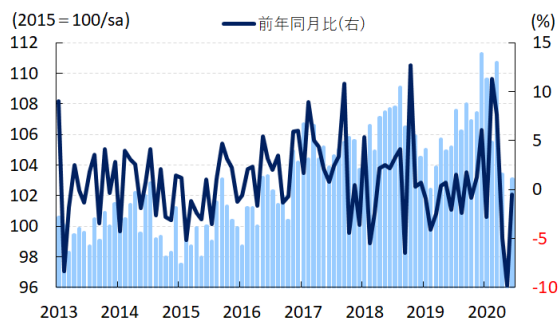


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[韓国]～主要国での経済活動再開を受けて輸出関連で生産底入れも、足下の状況は依然回復途上の段階～

31日に発表された6月の鉱工業生産は前年同月比▲0.50%と3ヶ月連続で前年を下回る伸びとなったものの、前月(同▲9.80%)からマイナス幅は縮小した。前月比は+7.17%と前月(同▲6.96%)から3ヶ月ぶりの拡大に転じているものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど頭打ちの状況が続いている。すべての分野で生産は拡大に転じており、主力の輸出財である半導体をはじめとする電子部品関連のほか、電気機械関連、自動車をはじめとする輸送用機器関連など幅広く製造業で生産が拡大しており、最大の輸出相手である中国での経済活動正常化の動きに加え、欧米など主要国での経済活動再開の動きが押し上げ材料になっている。平均設備稼働率も68.3%と前月(63.4%)から+4.9pt上昇しているものの、依然として70%を下回る水準で推移しており、回復途上の段階にあると判断出来る。

図2 KR 鉱工業生産の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[香港]～4-6月の実質GDP成長率は前年比▲9.0%と一段と減速、マイナス幅は過去最高の水準を更新～

27日に発表された6月の輸出額は前年同月比▲1.3%と4ヶ月連続で前年を下回る伸びとなったものの、前月(同▲7.4%)からマイナス幅は縮小した。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は2ヶ月ぶりの拡大に転じており、中期的な基調も拡大傾向で推移するなど底堅く推移している。財別では、発電機をはじめとする一部の機械製品関連に底堅い動きがみられるほか、縫製品など軽工業関連の輸出も堅調に推移する一方、電気機械関連では低迷が続くなど新型コロナウイルス(SARS-CoV-19)のパンデミック(世界的大流行)による世界経済の減速が重石になっている。国・地域別でも、ASEAN(東

南アジア諸国連合) などアジア新興国向けに底堅い動きがみられる一方、最大の輸出相手である中国本土向けは頭打ちしているほか、米国やEU (欧州連合)、日本など先進国向けの低迷も輸出全体の足かせになった。一方の輸入額は前年同月比▲7.1%と19ヶ月連続で前年を下回る伸びとなったものの、前月(同▲12.3%)からマイナス幅は縮小した。前月比は2ヶ月ぶりの拡大に転じているが、中期的な基調は減少傾向で推移するなど頭打ちしている。原油をはじめとする国際商品市況の底入れの動きを反映して中東など資源国からの輸入が押し上げられているほか、ASEANや中国本土などアジア新興国からの輸入に底堅い動きがみられる一方、米国やEUなど先進国からの輸入は鈍化して輸入全体の重石になった。結果、貿易収支は▲333.41億HKドルと前月(▲137.30億HKドル)から赤字幅が拡大した。

29日に発表された4-6月の実質GDP成長率(速報値)は前年同期比▲9.1%と4四半期連続のマイナス成長となり、前期(同▲8.9%)からマイナス幅も拡大して過去最大を更新した。前期比年率ベースでは▲0.40%と5四半期連続のマイナス成長となるも、過去最大のマイナス成長となった前期(同▲19.65%)からマイナス幅は縮小した。中国本土においては新型コロナウイルスの感染拡大や外出規制措置などの影響で年明け直後にかけて大きく下押し圧力が掛かった景気の持ち直しの動きがみられるなか、政府消費は景気刺激策の発動も追い風に比較的堅調な動きが続いているものの、家計消費は大きく弱含んでいる上、企業部門による設備投資も低迷しているほか、輸出は財及びサービスの両面で大幅マイナスが続くなど、内・外需双方で低調な推移が続いている。なお、足下では新型肺炎の感染再拡大を受けて外出の全面禁止をはじめとする感染抑制策を発表しており、家計消費をはじめとする内需への悪影響は必至であり、景気回復の後ズレは避けられそうにないと見込まれる。

30日に発表された6月の小売売上高(数量ベース)は前年同月比▲25.4%と17ヶ月連続で前年を下回る伸びとなったものの、前月(同▲34.0%)からマイナス幅は縮小した。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は4ヶ月連続で拡大するなど底入れが進んでいるものの、依然として中期的な基調は減少傾向で推移するなど勢いに乏しい状況が続いている。新型肺炎の感染拡大の動きが一巡したことを受けて外出制限措置が解除されていることを受けて、ペンタアップ・デマンドが発現するなど幅広い財で底入れの動きが出ているものの、雇用・所得環境の急速な悪化を受けて頭打ちの状況を抜け出せない展開が続いている。なお、今月に入って以降は新型肺炎の感染拡大の『第2波』が懸念されることを受けて、飲食店などを対象とする営業規制が再強化されており、関連産業を中心に下押し圧力が強まることが懸念される。

図3 HK 貿易動向の推移

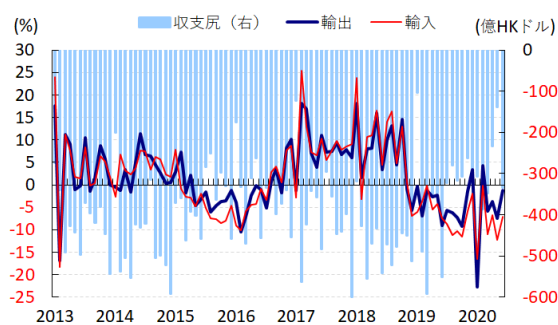


図4 HK 実質GDP成長率(前年比)の推移

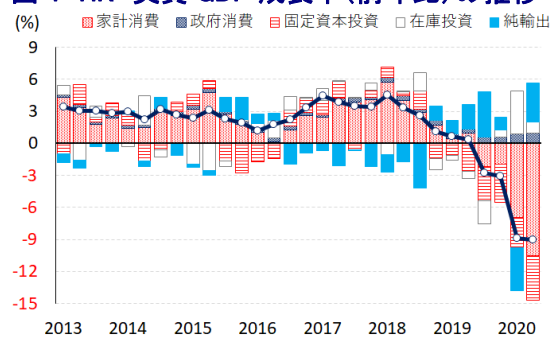
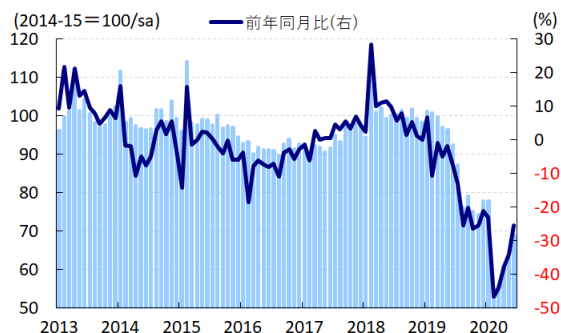


図5 HK 小売売上高(数量ベース)の推移

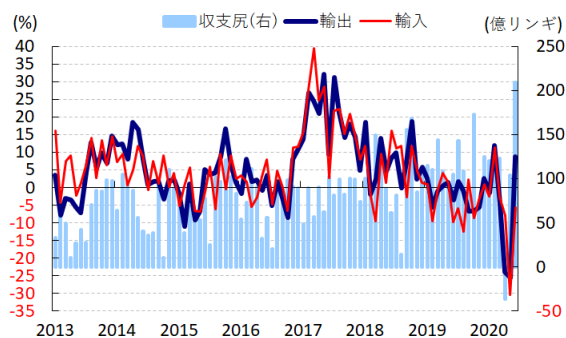


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[マレーシア]~主要国での経済活動再開の動きが輸出を押し上げ、月次ベースの貿易黒字額は過去最高に~

28日に発表された6月の輸出額は前年同月比+8.8%となり、前月(同▲25.5%)から4ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じた。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は4ヶ月ぶりの拡大に転じているほか、中期的な基調も拡大傾向となるなど急速に底入れが進んでいる。鉱物資源関連の輸出は引き続き弱含む展開が続いている一方、主力の輸出財である電子部品関連をはじめとする製造業関連で底入れが進んでいるほか、パーム油や天然ゴムをはじめとする農産品関連の輸出の堅調さも全体を押し上げている。中国での経済活動正常化の動きに加え、欧米など主要国での経済活動再開の動きを反映して幅広い国・地域向けに輸出に底入れの動きが確認された。一方の輸入額は前年同月比▲5.6%と4ヶ月連続で前年を下回る伸びとなったものの、前月(同▲30.4%)からマイナス幅は縮小した。前月比も6ヶ月ぶりの拡大に転じているものの、輸出とは対照的に中期的な基調は減少傾向で推移するなど力強さを欠く展開が続いている。消費財や資本財関連で底打ちする動きがみられる一方、中間財関連の輸入は弱含む展開が続いており、輸出の底入れが確認されているものの、先行きに対する不透明感が重石になっているとみられる。結果、貿易収支は+208.92億リングと前月(+103.87億リング)から黒字幅が拡大して単月ベースの黒字額は過去最高となっている。

図6 MY 貿易動向の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

以上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。